

ユニークネス欲求の発達変化に関する考察[†]

～自己評価としてのユニークネス記述と二つのアイデンティティ尺度得点との関連を中心にして～

森 和彦*

秋田大学教育文化学部

鈴木明日香**

秋田市役所

本研究では、小学4年生、小学6年生、中学2年生、高校1年生、大学1年生を対象に、青年期のユニークネス欲求の量的・質的な発達的变化を検討した。調査はユニークネス欲求尺度、個としてのアイデンティティ尺度、関係性に基づくアイデンティティ尺度、ユニークネス欲求に関する自由記述からなる質問紙を配付し行われた。主な調査結果は次のようになった。

- (1) ユニークネス欲求が高い者の方が、低い者と比べて個としてのアイデンティティ尺度得点の平均得点が高く、ユニークネス欲求が低い者の方が、高い者と比べて関係性に基づくアイデンティティ尺度得点の平均得点が高かった。ただしユニークネス欲求の高い者と低い者で、自由記述の平均回答数の差はみられなかった。
- (2) ユニークネス欲求は学年が上がるにつれ徐々に高まっていくものであるが、ユニークネス欲求に関する自由記述の平均回答数は、無回答者の増加に伴い、学年が高い方が少なくなる。
- (3) 中学2年生を境に、自己の特性がユニークであることの重要度が高まり、対環境内事物・事象関係、対人関係がユニークであることの重要度が低くなる。

これらの結果から、ユニークネス欲求の高低がアイデンティティの質的方向性に影響を与えることや、小学生の段階では、自分の行動スタイルからユニークさの自己知覚が生じることが多いが、中学生以降、行動スタイルよりも、自己の特性からユニークさの自己知覚が生じることが多くなるということが議論された。

キーワード：ユニークネス欲求、アイデンティティ尺度得点、小学生、中学生、高校生、大学生、自己評価

1. 問題提起と目的

1-1. 問題提起

現在、我々による児童生徒の自己評価力を向上させる研究プロジェクトにおいて、N（常に課題を

探し、向上心を持つ視点）、E（自己効力感を高める自分のすばらしさに対する気づき）、S（自らの作業結果に対する肯定的着地点の確認）からなるNES型学習自己評価法が導入され現場からの評価を得ている（森：2012, 2014）。しかしこの評価を実施する際に課題となったのは、この自己評価が常にポジティブな側面の評価であるため、社会的な比較を重視する日本の青年期の生徒において、E評価は難しいとする議論である。このポジティブな自己評価、もしくはそうありたいと願う気持ちの表出は、

2016年1月8日受理

[†]The Development of Need for Uniqueness

*Kazuhiko MORI, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

**Asuka SUZUKI, Akita City Office

特に中高生の教育実践の現場において、重要な意味があると思われる。とは言え、仮に自分の特性が優れている、またはユニークでありたいと願っているとしても、社会的比較が頻繁に行われる青年期において、突出した個性の表出は、日本の学校社会の中で生活する際には、いじめは言うまでもなく、必ずしもプラス要因として働いていないのかもしれない。このような社会的文脈の中で、そもそも自らが Only One として認知されたいと願う、あくまでもポジティブと認識されうるユニークさの欲求はいつ頃から発動し、発達していくのだろうか？

1-2. ユニークネス欲求

Snyder & Fromkin (1977, 1980) によると、ユニークネス欲求とは、人間に本来的に備わった欲求であり、他者と類似していない自己を知覚することにより自尊感情を高めようとする傾向性である。しかし山岡 (1993) によれば、彼らの尺度で測定されたものは社会的受容を考慮しない差異への欲求に留まっており、Snyder & Fromkin (1977, 1980) が元々分離しようと考えていた逸脱傾向も含まれる可能性がある。そこで我々は山岡 (1993) の尺度を用いて、小学生、中学生、高校生、大学生と横断的にユニークネス欲求尺度の実施を試みることにした。

また岡本 (1991) は、ユニークネス欲求は「自己のアイデンティティを指向する欲求」であるとし、ユニークネス欲求の発達の変化について、個性に関する関心が芽生える前の時期では低く、関心が芽生える時期には特に高くなると予測し、ユニークネス欲求とアイデンティティは互いに影響を及ぼし合っていると主張したが、検証は十分とは言えない。そこでアイデンティティの「個」と「関係性」の側面から検討することで、ユニークネス欲求の発達のな変化がより詳細に理解され得ると仮説を立てた。山田・岡本 (2008a) は、「自己の能力に対する信頼感を基盤に、個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面」である「個」としてのアイデンティティと、「自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に、他者と関係を築く能力を獲得し、他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面」である「関係性」に基づくアイデンティティから青年理解を試みている。そして山田・岡本 (2008a) の調査では、青年期における「個」の側面

は、自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れ、「関係性」の側面は、他者を自己とは独立した存在として認識し、親密な関係を築くことができる傾向として表れることが明らかになった。また、成人期のアイデンティティは社会的役割の影響が反映され、「個」と「関係性」が2つの軸として区分される(岡本, 1997)のに対し、青年期においては「個」としてのアイデンティティと「関係性」に基づくアイデンティティは完全に分離してはならず、融合的であることが示された。この観点からユニークネス欲求は個としてのアイデンティティとともに促進され、関係性に基づくアイデンティティを抑制する方向に働くと推論できよう。もしユニークネス欲求が加齢とともに発達するのであれば、両観点のアイデンティティも加齢に伴い変動するはずである。

1-3. ユニークネス欲求の質的側面

山岡 (1989) は、ユニークネス追求行動に関する研究の結果、ユニークネスの本質は他者と異なっている属性の数を問題とするような量的差異ではなく、どのような属性で異なっているのかを問題とする質的差異(様々な属性の有様)であるとしている。他者との量的な差異(どの程度異なっているか)はユニークネスの本質ではないという観点である。個人の全体的なユニークネスの自己知覚は個々の属性でのユニークさの知覚を反映したものであるが、山岡 (1989) によれば、中心属性におけるユニークネスの自己知覚(自己の特性の認知)が、その個人の全体的なユニークネスの自己知覚を大きく規定しているのである。この様な主張を考慮すれば、質問紙で一つの尺度上に量的に捉えるものとは別の、質的観点(属性の種類や特徴の有様)でユニークネス欲求の発達を数値化して記述する必要がある。また自己概念において中心的な位置を占める属性に関して、山岡 (1989) はユニークさの自己知覚が特に重要となると述べるとともに、ユニークネス欲求が高い者は個人レベルで、低い者は集団レベルでの自己の概念化が促進されるとした(山岡, 1995)。そこで、「自己の特性」に関する属性がユニークネス知覚に占める割合を調べることにした。なお、自己概念の発達の変化についての研究は数多く行われているとは言え、実際に発達に伴い、ユニークさの自己知覚に重要な諸属性が、量的にも質的にも小学生の段階

から成人に至るまでどのように変化するのかはまだ十分明らかにされていない。

1-4. 目的

そこで本研究では、第一に、ユニークネス欲求を個としてのアイデンティティ、関係性に基づくアイデンティティという両観点から関連性を検討し、児童期後半から青年期に渡るまでのユニークネス欲求の量的な発達的变化を明らかにすることを目的とする。さらに、ユニークさの自己知覚が重要となる属性項目を自由記述で収集・分類し、青年期前後のユニークネス欲求の質的な発達的变化を数値化して明らかにすることを第二の目的とする。

1-5. 仮説

- ①ユニークネス欲求尺度得点は、学年が上がるにつれて高くなる。
- ②ユニークネス欲求尺度得点は、個としてのアイデンティティ得点 (IID) と正の相関がある。
- ③ユニークネス欲求尺度得点は、関係性に基づくアイデンティティ得点 (RID) と負の相関がある。
- ④自らのポジティブなユニークネスに関する自由記述において、学年が上がるにつれ、「自己の特性」の属性割合が高くなり、相対的に他の属性割合が低くなる。

2. 方法

調査対象 A県B小学校の4年生66名、6年生83名、C中学校の2年生175名、D高等学校の1年生105名、E大学の1年生87名の計516名が最終的に調査に参加した。

尺度

使用した3つの尺度のうち、小学生用の尺度質問の漢字にはすべて仮名を振り、難解と思われる表現には、易しく言い換えた表現を括弧書きで加えた。なお、中学生以上の尺度の漢字にも一部振り仮名、括弧書きの部分設けた。

(1)**ユニークネス尺度 (山岡, 1993)**：これはユニークネス欲求を測定する尺度である。尺度は24項目で『対人関係におけるユニークさ (4項目)』、『自尊心に基づいた自己顕示欲 (5項目)』、『ユニーク関連属性 (6項目)』、『対人的独立性 (2項目)』、『私的価値観 (2項目)』、『判断における自律性 (5項目)』

からなり、『非常に当てはまる』から『全く当てはまらない』までの5件法で、24点から120点の範囲で測定した。

(2)**個としてのアイデンティティ尺度 (山田・岡本, 2008b)**：個としてのアイデンティティとは、自己の能力に対する信頼感を基盤に、個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面 (山田・岡本, 2008a) を示す。尺度は15項目で、『自己への信頼感・効力感 (5項目)』、『将来展望 (5項目)』、『自律性 (5項目)』からなり、『非常に当てはまる』から『全く当てはまらない』までの5件法で、15点から75点の範囲で測定した。

(3)**関係性に基づくアイデンティティ尺度 (山田・岡本, 2008b)**：関係性に基づくアイデンティティとは、自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に、他者との関係を築く能力を獲得し、他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面 (山田・岡本, 2008a) を示す。尺度は13項目で、『自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値づけ (7項目)』、『見捨てられ不安 (3項目)』、『関係性の中での自己の定位 (3項目)』からなり、『非常に当てはまる』から『全く当てはまらない』までの5件法で、13点から65点の範囲で測定した。

(4)**ユニークネス欲求に関する自由記述**：山田 (1989) を参考にして「他者と異なる自分の良いところ」を20個以内で自分が思いつくところから自由記述する質問紙を作成した。そして、記述した個性の重要度を『とても重要である』から『全く重要でない』までの7件法で測定した。本来、ユニークネス欲求とユニークさは異なるものであるが、『他者と異なっていたいところ』を回答させるのは難しいと考え、『7: とても重要である』および『6: かなり重要である』と答えた項目を以て、自らのユニークネス欲求の表出と捉えることにした。この記述項目の多さは多視点的に自らをポジティブに捉えようとする構えの表れと見なすことができよう。

手続き 大学生に対する調査は質問紙を個別に配付した。また小学生、中学生、高校生に対する調査は、担任の教師の指示により授業時間を利用して行われた。すべての学年において記入が終了直後に質問紙が回収された。なお自由記述を含むので、特に制限時間は設けていない。

3. 結果

得られた結果は表1にユニークネス欲求尺度得点、個としてのアイデンティティ尺度得点、関係性に基づくアイデンティティ尺度得点、各自のポジティブなユニークネス知覚に関する全自由記述数についての平均値と標準偏差が示されている。

表1 各学年におけるユニークネス欲求尺度得点 (NU), 個としてのアイデンティティ尺度得点 (IID), 関係性に基づくアイデンティティ尺度得点 (RID), 各自のポジティブなユニークネス知覚に関する自由記述数 (自由記述数) の平均値と標準偏差

		ユニークネス尺度	IID	RID	自由記述数
小4	X	69.92	46.03	44.12	12.33
	SD	13.57	8.2	8.51	4.39
	N	66	66	66	66
小6	X	70.82	44.55	44.99	3.18
	SD	11.74	10.38	8.47	4.83
	N	83	83	83	83
中2	X	73.87	43.99	45.39	5.94
	SD	12.32	8.6	8.39	4.6
	N	175	175	175	175
高1	X	74.15	43.33	45.16	3.6
	SD	10.46	9.42	8.68	4.18
	N	105	105	105	105
大1	X	74.56	43.52	45.26	3.68
	SD	9.48	8.67	6.88	4.39
	N	87	87	87	87
全体	X	73.05	44.13	45.09	5.46
	SD	11.68	9.05	8.22	5.32
	N	516	516	516	516

3-1. ユニークネス欲求の学年差

ユニークネス欲求の学年差を検証するために、得られたユニークネス欲求尺度得点から1要因の分散分析を行ったところ、ユニークネス欲求尺度得点は学年差があることが5%水準の危険率で認められた ($F(4, 511) = 2.79, p < 0.05$)。従って仮説①「ユニークネス欲求尺度得点は、学年が上がるにつれて高くなる」は支持された。ただし、多重比較 (TukeyのHSD法) では有意差は認められていない。

3-2. ユニークネス欲求尺度得点と個としてのアイデンティティ尺度得点との関係

ユニークネス欲求尺度得点は、個としてのアイデンティティ尺度得点と相関係数 ($r = 0.255$) において有意な正の相関 (1%水準) 認められた (表2)。

仮説②「ユニークネス欲求尺度得点は、個としてのアイデンティティ得点 (IID) と正の相関がある」も支持された。

そこで年齢に関係なくユニークネス欲求高群と低群が、両群の個としてのアイデンティティ尺度得点の平均に有意な差を生じる関係になっているかを確認するため t 検定を行った。まず各学年のユニークネス欲求尺度の合計得点の上位約25% (小学4年生16名, レンジ79~104点, 小学6年生23名, レンジ78~98点, 中学2年生45名, レンジ80~114点, 高校1年生25名, レンジ82~101点, 大学1年生22名, レンジ81~101点) をユニークネス欲求高群, 下位約25% (小学4年生18名, レンジ44~60点, 小学6年生22名, レンジ44~62点, 中学2年生42名, レンジ38~65点, 高校1年生26名, レンジ49~67点, 大学1年生22名, レンジ56~67点) をユニークネス欲求低群とした。その結果, ユニークネス欲求高群の人数は131名, 平均点は88.08点となる一方で, ユニークネス欲求低群の人数は130名, 平均点は59.38点となった。この両群各々の個としてのアイデンティティ尺度得点の平均点を求め, 分散の検定を行った後, t 検定により検証したところ, 有意差がみら

表2 各学年におけるユニークネス欲求尺度得点 (NU), 個としてのアイデンティティ尺度得点 (IID), 関係性に基づくアイデンティティ尺度得点 (RID), 自らのポジティブなユニークネス知覚に関する自由記述数 (自由記述数) の相関関係

		NU	IID	RID
小4 (N=66)	IID	.067		
	RID	-.276*	.547**	
	自由記述	.085	.063	.079
小6 (N=83)	IID	.365**		
	RID	-.256*	.376**	
	自由記述	.022	.049	-.058
中2 (N=175)	IID	.338**		
	RID	-.039	.475**	
	自由記述	.177*	.343**	.139
高1 (N=105)	IID	.140		
	RID	-.221*	.552**	
	自由記述	.021	.115	.048
大1 (N=87)	IID	.391**		
	RID	.096	.470**	
	自由記述	.067	.190	.072
全体 (N=516)	IID	.255**		
	RID	-.124**	.473**	
	自由記述	.035	.195**	.038

** : $p < .01$, * : $p < .05$

れ、個としてのアイデンティティ尺度得点の平均得点は高群の方が低群よりも高い ($t=4.79, df=250, p<.001$) ことが確認できた。

3-3. ユニークネス欲求尺度得点と関係性に基づくアイデンティティ尺度得点との関係

ユニークネス欲求尺度得点は、関係性に基づくアイデンティティ尺度得点と相関係数 ($r = -0.124$) において有意な負の相関 (1%水準) が得られた (表2)。これにより仮説③「ユニークネス欲求尺度得点は、関係性に基づくアイデンティティ得点 (RID) と負の相関がある」も支持された。

そこで年齢に関係なくユニークネス欲求高群と低群の両群が、関係性に基づくアイデンティティ尺度得点の平均値に有意な差が表れるような関係になっ

ているかを確認するため t 検定を行った。その結果、関係性に基づくアイデンティティ尺度得点の平均得点は低群の方が高群よりも高かった ($t=3.32, df=259, p<.01$)。

3-4. ユニークネスに関するポジティブな特性の記述内容について

自由記述は山田 (1995) を参考に、「自己の特性」、「対環境内事物・事象関係」、「対人関係」、「その他」、「否定的表現」を上位領域として、著者らがまず上位領域、そして下位領域ともに分類 (表3) し、最初の3つの上位領域の属性間での各比率を回答者毎に求めた。ただし、意見が分かれる記述については調査に参加していない2名の心理を専攻する大学生が下位領域を含め再分類し、合致している場合はそ

表3 記述内容分類表

上位領域/下位領域	具体例
自己の特性	自己の身体的・心理的な特性の記述
1. 客観的属性	小学生だ、野球部に入っている
2. 性格	優しい、明るい、元気
3. 対人的態度	友達に優しく接する、周囲の人と協力しようとする
4. 身体・健康状態	健康だ、風邪をひかない
5. 容姿	目が大きい、背が高い
6. 能力・適性	器用、機械の操作が得意、ピアノが弾ける
7. 日常生活・習慣	時間を見て行動する、敬語を使う
8. 生活感情	いつもうきうきしている、悩み事がある
9. 信念・価値観	笑顔は大事だと思う、やると決めたら最後までやる
10. その他	自己の特性のうち、1~9に当てはまらないもの
対環境内事物・事象関係	自己と外的対象とのかかわりの記述
11. 職業	将来なりたい職業がある
12. 勉学	家庭学習を頑張っている、国語が好き
13. 運動	毎日走っている、サッカーができる
14. 趣味	絵を描くことが好きだ、趣味は音楽鑑賞だ
15. 学校生活	授業中進んで発表する、係の仕事をしっかりやる
16. 食物・衣服	食べ物は残さず食べる、食べ物の好き嫌いがあまりない
17. 金銭・所有物	無駄遣いをしない、ゲームをたくさん持っている
18. 日常生活	ペットの世話をする
19. その他	対環境内事物・事象関係のうち、11~18に当てはまらないもの
対人関係	自己と他者とのかかわりの記述
20. 両親	母親の手伝いをする
21. 家族	家族と仲良くする
22. 友人	友達が多い、よく友達と遊ぶ
23. 教員	先生の話をよく聞く
24. 異性	女子に暴力を振るわない
25. 不特定の人	誰とでも会話できる
26. その他	対人関係のうち、20~25に当てはまらないもの
その他	上記のいずれにも当てはまらないもの
否定的表現	自己を否定的に捉えているもの

の分類に、合致していない場合は『その他』に分類することとした。

各自のポジティブなユニークネス知覚に関する自由記述で前述の3つの上位の属性領域（自己の特性、対環境内事物・事象関係、対人関係）および下位領域に分類され、かつ重要度が6と7と認定した項目数を学年ごとにまとめたものが表4に示されている。本研究ではこれをユニークネス欲求に関する質的な指標と見なすこととする。この自らが重要度が高いとみなすユニークネス欲求に関する自由記述において、上位領域属性と学年および男女の要因の効果を検討するため、各参加者の記述した上位領域属性内での割合（比）を指標に、学年（水準5）×性別（水準2）×上位領域（水準3）の3要因分散分析（表5）を行った。その結果、学年（ $F(4,506)$

$=13.71, MSe=683.56, p<.001$ ）要因、および上位領域（ $F(1.62,817.60)=125.22, MSe=1124.97, p<.001$ ：Huynh-Feldtにより調整）要因の主効果が有意であった。

また、学年×上位領域（ $F(6.46,817.60)=12.17, MSe=1124.97, p<.001$ ：Huynh-Feldtにより調整）、性別×上位領域（ $F(1.62,817.60)=5.05, MSe=1124.97, p<.01$ ：Huynh-Feldtにより調整）の交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った。その結果、自己の特性（ $F(4,506)=10.50, MSe=1653.56, p<.001$ ）、対環境内事物・事象関係（ $F(4,506)=25.67, MSe=483.32, p<.001$ ）、対人関係（ $F(4,506)=4.76, MSe=364.435, p<.01$ ）の各々に有意差がみられた。多重比較の結果（Bonferroniの方法）、自己の特性（図1）において、中学2年生の割合得点の

表4 各学年のユニークネス欲求に関する自由記述数（重要度6・7）の合計

上位領域／下位領域	小4	小6	中2	高1	大1
自己の特性	183	92	377	141	129
1. 客観的属性	0	0	1	0	0
2. 性格	18	29	145	58	54
3. 対人的態度	43	19	105	43	43
4. 身体・健康状態	3	2	3	1	1
5. 容姿	6	3	7	3	0
6. 能力・適性	22	7	6	11	6
7. 日常生活・習慣	49	20	20	8	5
8. 生活感情	1	0	6	0	0
9. 信念・価値観	5	3	25	4	2
10. その他	36	9	59	13	18
対環境内事物・事象関係	184	64	75	17	13
11. 職業	3	3	1	1	1
12. 勉学	39	15	7	2	0
13. 運動	35	6	4	1	2
14. 趣味	34	11	25	3	5
15. 学校生活	40	7	11	2	2
16. 食物・衣服	17	0	8	3	2
17. 金銭・所有物	3	9	2	3	0
18. 日常生活	7	10	1	0	0
19. その他	6	3	16	2	1
対人関係	75	28	73	21	15
20. 両親	2	1	0	0	0
21. 家族	2	2	1	3	1
22. 友人	40	13	23	9	7
23. 教員	9	0	1	0	0
24. 異性	1	0	0	0	0
25. 不特定の人	20	12	36	7	5
26. その他	1	0	12	2	2
その他	1	0	3	0	0
否定的表現	4	0	3	2	0
計	447	184	531	181	157

表5 自ら重要度が高いとみなすユニークネス欲求に関する自由記述の各人の上位領域内での割合についての学年、性別、上位領域要因、交互作用等の3要因分散分析表

分散分析表 (3 要因: 対応なし・対応なし・対応あり) (Huynh-Feldt)					
変動因	平方和	自由度	平均平方	F	
between-subject					
学年	37491.064	4	9372.766	13.712	$P<.001$
性別	218.580	1	218.580	0.320	<i>n.s.</i>
学年*性別	1445.449	4	361.362	0.529	<i>n.s.</i>
誤差	345883.253	506	683.564		
within-subject					
上位領域 a	227626.351	1.616	140873.818	125.224	$P<.001$
上位領域 x 学年 a	88500.487	6.463	13692.836	12.172	$P<.001$
上位領域 x 性別 a	9181.196	1.616	5682.076	5.051	$P<.01$
上位領域 x 学年*性別 a	5967.166	6.463	923.243	0.821	<i>n.s.</i>
誤差 (上位領域) a	919780.951	817.604	1124.972		
全体	1636094.496	1348.762	b		

a Mauchly の球面性の検定が有意であったため、Huynh-Feldt の ϵ (イプシロン) による。

b 表内の変動因の自由度の合計を示している。上位領域要因の水準数×被験者数-1 の値は1547。

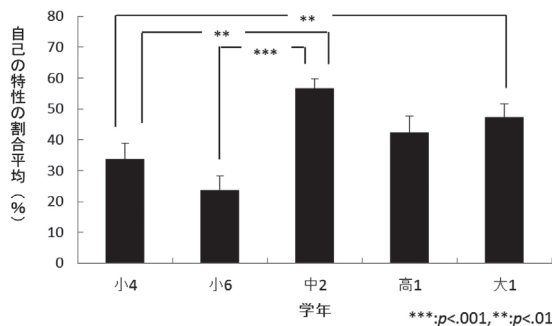


図1 各学年のユニークネス欲求に関する自由記述において自己の特性に関する割合の平均値

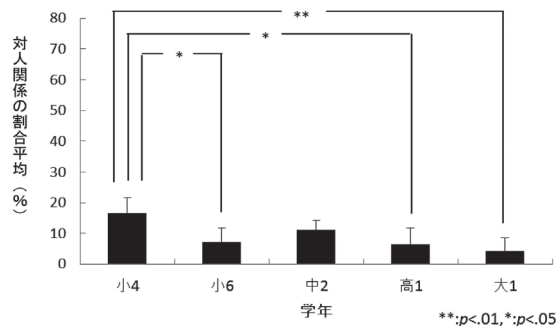


図3 各学年のユニークネス欲求に関する自由記述において対人関係に関する割合の平均値

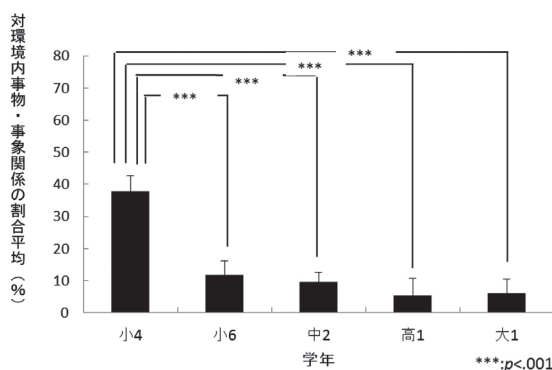


図2 各学年のユニークネス欲求に関する自由記述において対環境内事物・事象関係性に関する割合の平均値

平均値が、小学4年生、小学6年生の割合得点の平均値よりも高く、大学1年生の割合得点の平均値が、小学6年生よりも高かった。また対環境内事物・事

象関係 (図2) において、小学4年生の割合得点の平均値が他の学年よりも高かった。対人関係 (図3) においても、小学4年生の割合得点の平均値が小学6年生、高校1年生、大学1年生よりも高かった。これらの結果は概ね仮説④を支持している。年齢間の比較では、「自己の特性」は中2と小6の間で、「対環境内事物・事象関係」、「対人関係」は小4と小6の間に差が見られた。

4. 考察

4-1. ユニークネス欲求の量的な発達変化について

ユニークネス欲求尺度得点では、分散分析の結果有意差がみられたものの、多重比較では有意差はみられなかった。ユニークネス欲求は学年が上がるに

つれ、少しずつ徐々に高まっていくものであると考えられる。この結果をもたらした理由としては、認知発達や社会的相互作用等の環境要因の影響などが複合的に働いているのであろう。すなわち、学年が上がるにつれて個人の差異を認め合えるようになることで、ユニークネス欲求が発揮しやすくなり、それによってユニークネス欲求が高まる可能性がある。

ユニークネス欲求尺度得点は、個としてのアイデンティティ尺度得点と相関係数 ($r=0.255$) において有意な正の相関 (1%水準) が、また関係性に基づくアイデンティティ尺度得点と相関係数 ($r=-0.124$) において有意な負の相関 (1%水準) が認められた。しかも個としてのアイデンティティ尺度得点と関係性に基づくアイデンティティ尺度得点ではともに学年間に差はみられなかった。両アイデンティティ尺度が、ユニークネス欲求尺度と各々正負の相関関係を示しており、かつ年齢条件を合算したユニークネス欲求尺度の高群と低群の間に明白な差が認められることを考慮すれば、ユニークネス欲求とアイデンティティの関係は、加齢に伴う発達の変化と言うよりもむしろアイデンティティの個人差の発達という観点から捉えることが望ましいことを示していると考えられる。

しかも、両アイデンティティ尺度得点間には比較的強い正の相関 (0.475) がみられている (表2)。これらは、山田・岡本 (2008a) と同様の結果であり、青年期において、個としてのアイデンティティと関係性に基づくアイデンティティは融合的であることも示された。

また、学年ごとにユニークネス欲求平均値を算出し、平均値より高い者をユニークネス欲求高群、低い者をユニークネス欲求低群とし、個としてのアイデンティティ尺度得点と関係性に基づくアイデンティティ尺度得点を見ると、ユニークネス欲求高群は低群より個としてのアイデンティティ尺度得点が高く、低群は高群より関係性に基づくアイデンティティ尺度得点が高くなっており、ユニークネス欲求が高い者は、個としてのアイデンティティが発達しており、単独の個人として自己を捉え、一方、ユニークネス欲求が低い者は、関係性に基づくアイデンティティが発達しており、他者との関係性の中から自己を捉えていると推論できる。この結果は山岡 (1995) の、ユニークネス欲求が高い者は個人レベ

ルで、低い者は集団レベルでの自己の概念化が促進されるという結果とほぼ同様の結果であると考えられる。

4-2. ユニークネス欲求の質的 (ユニークネス欲求の自由記述内容による上位領域内の割合の違い) な発達変化について

学年が上がるにつれてユニークネス欲求に関する自由記述内容は変化し、上位領域 (自己の特性、対環境内事物・事象関係、対人関係) の各自の割合の平均値も変わること (図1, 2, 3) が示唆されたため、上位領域毎に考察する。

4-2-1. 自己の特性

自己の特性においては、どの学年でも比較的重要度が高いことが確認された。また、学年が上がるにつれ重要度が高まることについては、中学生2年生の割合平均値が小学4年生、6年生よりも高く、大学1年生の平均値が小学4年生より高いこと (図1) から部分的にのみ見られた。一方、平均記述数では、小学4年生の記述数が中学2年生を除く他の学年より多い (表4)。これらを基に考察すれば、自己の特性については、発達段階に応じて重要度が徐々に高まっていくというよりは、中学生の段階で自己の特性の重要度が高まり、その後も継続していくと捉えられる。また、記述量が多ければ必ずしも重要度も高くなるわけではないことが示された。この解釈は、自己に関する研究領域において重要度という概念が重視されなければならないとする森本 (2011) の見解と一致する。しかも自己の特性は、中学2年生、高校1年生、大学1年生の割合平均が、小学4年生、小学6年生の割合平均よりも高い (図1)。つまり、高校1年生、大学1年生では、自己の特性に分類される内容が記述数では減少するものの、他の領域と比較して自己の特性をユニークネスとしてより重要視しているということである。なおこの減少の理由として、社会的比較が強化され、より広く他者と自己とを比較をすることが可能になったことが考えられる。多くの他者と比較することで、ある属性に関して自己と類似度の高い他者と比較することが増える。そのため自分では「個性」だと捉えたとしても、他者との差異は小さいと感じ、重要度を高く評定できる項目が減少したと解釈することもできよう。

さらにまた下位領域（表4）で特異的なのは性格と対人的態度における自己の特性であり、児童期から青年期への自己評価の有様の変化を見て取ることもできる。

4-2-2. 対環境内事物・事象関係

対環境内事物・事象関係において、平均記述数、割合平均値ともに、小学4年生の得点が他の学年よりも高く（図2）、学年ごとに比較しても、小学4年生においては対環境内事物・事象関係の割合平均値が高いが、中学2年生、高校1年生、大学1年生は低くなっていた。このことから環境内事物・事象とのかかわりは、学年が上がるにつれ、重要度が低下すると考えられる。この結果は、山田（1989）とも合致している。

4-2-3. 対人関係

対人関係においては、割合平均値において小学4年生の得点が中学2年生を除く他のすべての学年より高かった（図3）。とは言え、自己の特性領域より、占める割合が少ないことは明らかで、すべての学年において、他者とのかかわりはユニークネスの自己知覚においてあまり重要ではないと見なしているようにも感じられる。少なくとも小学6年生以降、ユニークネスに関しては他者とのかかわりの重要度はさらに弱まると考えられる。

またさらに下位領域における友人や不特定の人に対するユニークネス言及が、後期青年期（高校1年生・大学1年生）において、それまでとは異なっており、後期青年期の特性を明確に示していると推論することもできよう。

4-3. 総合的考察

本調査のすべての結果をもとに、総合的に考察すると、ユニークネス欲求の量的な変化に関しては、ユニークネス欲求は学年が上がるとともに徐々に高まるが、それは両アイデンティティ側面の増大そのものによるものではないということが示された。実際、ユニークネス欲求の発達には、認知発達や社会的相互作用などのさまざまな要因が影響していると考えられている。とは言え、ユニークネス欲求の高さの違いが、個としてのアイデンティティと関係性に基づくアイデンティティの高さの違いとに関係している結果から、むしろユニークネス欲求の高低が

アイデンティティの質的方向性に影響を与える、またはその逆の可能性がある。

ユニークネス欲求の質的な変化（本論文ではユニークさの多面的な自己知覚の表現）に関しては、年齢が上がるにつれ、自己の特性に関する重要度が高まり、対環境内事物・事象や他者とのかかわりの重要度が相対的に低下する。すなわち、小学生の段階では、自分の行動スタイルからユニークさの自己知覚が生じることが多いが、中学生以降、行動スタイルよりも、自己の内面的な特徴（自己の特性）からユニークさの自己知覚が生じることが多くなると見なすことができる。「ユニークでありたい」という気持ちの高低は思考や行動に影響を与えるので、ユニークネス欲求とユニークさの自己知覚そして自己評価は単純に切り離すことができない。であるならば本研究では、「ユニークネス欲求が生じる属性」の発達的变化が、自由記述においても表現され得ると考えても問題がないように思われる。

NES評価等自己評価の視点から考察してみれば、NES自己評価法の使用により、中学生が自分のポジティブなユニークさに価値を置いていることを再確認する可能性があるとともに、小学校中学年以降の子どもたちにも継続的なNES自己評価を課すことで、「個人の特性の伸長」およびその認知の方向性の確認が可能であると本研究結果から示唆される。「個人の特性の伸長」をどのように教育実践の中で実現するかは今日の教育課題であるが、ポジティブ評価のNES自己評価法は、特別活動を含めた諸教科の学習活動の中で、その方法の一つになりうると思われる。

5. 参考・引用文献

- 森 和彦 2012 NES型学習自己評価法の工夫と改善～公立小学校での非限定的臨床応用による考察～ 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 34, 119-128.
- 森 和彦 2014 NES型学習自己評価法の工夫と改善(2)～特別支援学校、特別支援学級での試験の実践応用に関する考察～ 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 36, 125-131.
- 森本哲介 2011 自己概念における重要度の意義 立正大学心理学研究年報(2), 97-106.
- 岡本浩一 1991 ユニークさの社会心理学 川島書

店

- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版
- Snyder,C.R.,& Fromkin,H.L. 1977 Abnormality as a positive characteristic: the development and validation of a scale measuring need for uniqueness, *Journal of Abnormal Psychology*, 86,(5), 518-527.
- Snyder,C.R.& Fromkin,H.L. 1980 *Uniqueness: The human pursuit of difference*. New York: Plenum.
- 山田みき・岡本祐子 2008a「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析 発達心理学研究, 19, 108-120.
- 山田みき・岡本祐子 2008b「個」と「関係性」概念からのアイデンティティ尺度の作成 広島大学心理学研究, (8), 89-98.
- 山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究－20答法での自己記述を手がかりとして－ 心理学研究, 60, (4), 245-252.
- 山田ゆかり 1995 青年期における自己概念の発達の变化－20答法での自己記述を手がかりとして－ 名古屋文理短期大学紀要, (20), 19-26.
- 山岡重行 1989 3種類のユニークネス剥奪フィードバックがユニークネス追求行動に及ぼす効果実験 社会心理学研究, 29, (1), 13-25.
- 山岡重行 1993 ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究, 9, (3), 181-194.
- 山岡重行 1995 自己確証としてのユニークネス追求行動 心理学研究, 66, (2), 107-115.

6. 謝辞

本研究は、調査の実施にあたり、ご協力いただいた大学生、児童生徒の皆さん、および関わって頂いた学校の先生方に感謝致します。ここに記して深く御礼申し上げます。

Summary

The purpose of the current article is to investigate the development process of need for uniqueness in relation to the individuality-based identity, the relatedness-based identity, and the awareness of self-uniqueness. The related 4 questionnaires were carried out for 4th and 6th graders in elementary school, 2nd graders in junior high school, 1st graders in high school, and 1st grade university students. The results indicated that (1) the need for uniqueness was changing from 10 years old over a decade, (2) the individuality-based identity scale points were positively correlated with the need scale points for uniqueness, (3) the relatedness-based identity scale points were negatively correlated with the need scale points for uniqueness, and (4) it was over 14 years old who give priority to self-characteristics in need for uniqueness.

Key Words : Need for Uniqueness, Individuality-Based Identity, Relatedness-Based Identity, Awareness of Self-Uniqueness

(Received January 8, 2016)